

校 友 會 誌

第 四 十 九 號

昭 和 五 十 二 年 二 月 五 日 發 行

滋 賀 縣 立 彥 根 中 學 校

謹  
ミ  
テ

紀  
元  
二  
千  
六  
百  
年  
ノ  
紀  
元  
節  
ヲ  
賀  
シ  
奉  
ル



校訓

本校生徒ハ 聖旨ヲ奉體シ 敬神崇祖  
質實剛健 勤勉力行 和衷一心 以テ  
至誠奉公ノ國士タルベシ

校歌

—澤村專太郎氏作歌—

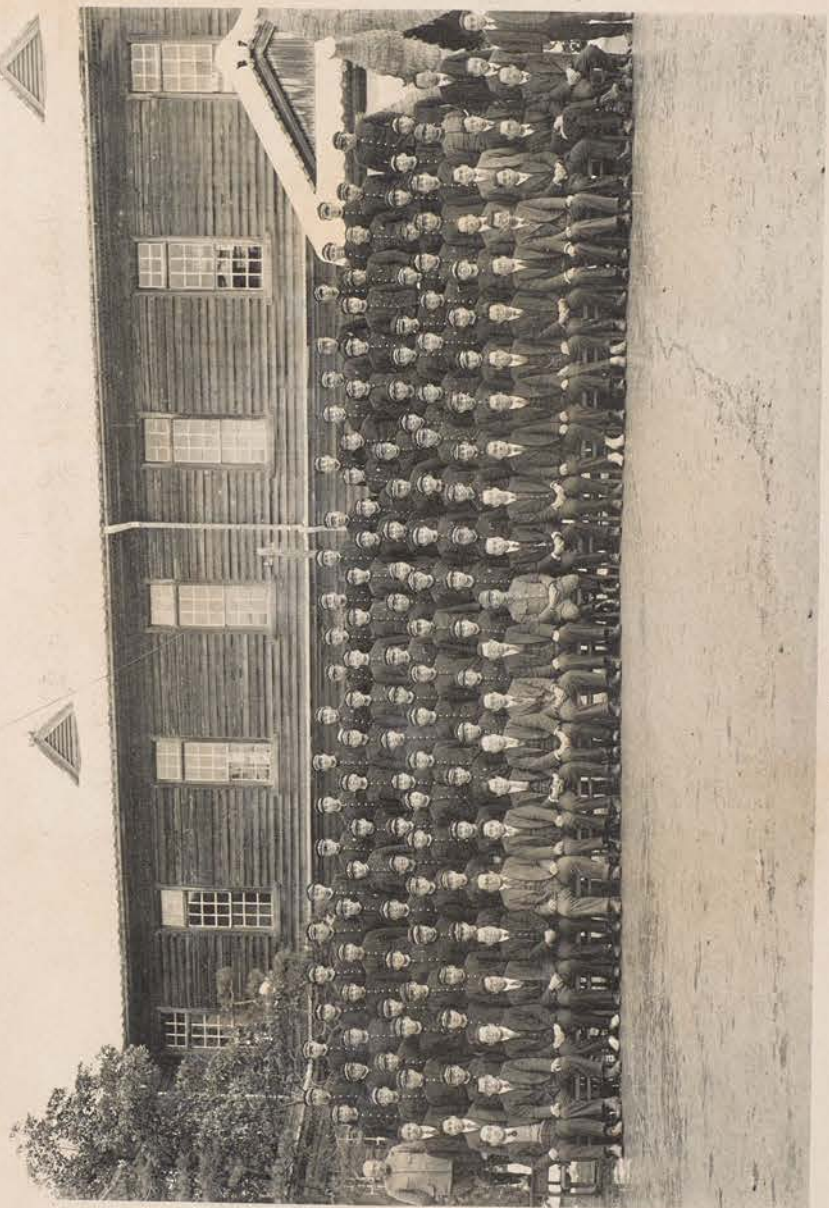
- 一 湖への春にかざられて 雲吹き拂ふ膽吹山  
麓の若葉新しく 我等が園は輝けり
- 二 緑静けき學びやに 智徳の扉啓きつゝ  
明けはなれゆく人の世の 我等が窓に光あり
- 三 不撓の決意と力行の 若き生命にまもられて  
幸とほまれに美はしく 我等が園はかがやけり
- 四 剛健自助の門によりて 湖畔のまもり嚴かに  
たてる金龜の學びやの あゝ譽ある幾春秋
- 五 金剛不壞のこゝろもて 勉め勤しむ森のかけ  
われらが窓の燦爛と あゝほまれある幾春秋
- 六 天のかゞやき地に享けて こゝろ澄みたる琵琶の湖  
金龜の春ととこしへに 我等が園は新たなり

應援歌

- (一) あゝ英傑が夢のあと  
歴史は遠く三百年  
金龜城頭我立ちて  
尙武の風に嘯けば
- (二) 花たちはなの香に匂ふ  
健兒の意氣は天を衝く  
氷刀腰に夜泣いて  
たぎる正義の血潮あり
- (三) あはれ雲待つ蛟龍の  
猛者一たび地を揺れば  
強風陣々雲捲いて  
行く手に敵の影も無し
- (四) 旌旗は高く天を摩し  
金鼓勝利を告ぐる時  
月の桂の香にむせぶ  
今宵健兒の夢如何に

青少年學徒ニ賜ハリタル勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繫リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑿ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ



# 悠久二千六百年

## 學校長 足立芳之助

紀元二千六百年だ。樞原建都のそのかみから、隆昌の一途をたどつて、昭和盛代の今日まで、悠久二千六百年を闊したのである。

だが、わが皇國の歴史は、更に悠遠なるものがあることを忘れてはならぬ。すなはち遠く神代の御代まで溯るならば、天地とともに、否天地にも先きだつて生れたのが、わが皇國なのである。

天地をもその御分身として御生みなされた、神の御末のわが皇國は、神にまします天皇が、天つ日を代々うけ継ぎたまひ、寶祚の隆えまさんこと、天壤とともに窮ないのである。

開闢以來生々發展、神代幾千萬てふ年所を歴て、神武天皇の御代に至り、朝日の直刺す、夕日の日照る、日向の國から、青山のよもに周れる、東の美地に都を御遷しあそばされ、上は天祖の國を授けたまふ御徳に答へ、下は皇孫養正の御心を弘めたまひ、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて而して宇と爲したまうてから、悠久二千六百年を闊したのである。

今や聖戰第四年。畏くも大御稜威の下、精忠無比なる皇軍將士の奮闘は、銃後國民の至誠と相待つて、新東亞建設の聖業は著々として進展し、紀元二千六百年の和やかな初光は、日滿支を均しく照らして、東亞百年の安定を象徴してゐるのである。

天地のかくも榮ゆる大御代に、忝くも天皇の御民として生を皇國に享けたわれ、生ける驗の感激に心魂うちふるへ、文も體を爲さぬを恐れながら、謹みて聖壽の萬歳を壽ぎ奉り、わが皇國の彌榮を祝ぎまつり、九百健兒とともに新しき力を以て至誠奉公の大道に邁進し、臣子の分を全うせんことを期する次第である。

## 勤勞奉仕修練會の回顧

足立芳之助

本稿は「彦中」第五號、第六號、第八號所載の讀稿であつて、昭和十三年の夏、多賀において行ぜられた勤勞奉仕修練會の回顧である。本稿だけを讀んでも勿論結構であるが、出来れば前稿と併せ讀んで貰ひたい。少し長くなつたやうであるが、辛抱して讀めば、必ず何物か自得するところがあるであらう。

既に叙べたやうに、このたびの勤勞は奉仕を目的とするものであつた。そして、生徒が最初から奉仕といふことを深く自覺し固く決心してかゝつたことが、凡てが好調に運んだ最大の原因であつたと、わたしは信じる。然らば、かくも偉大な成果を招來した奉仕とはそも如何なることであるか、今少し突込んでこれを検討してみる必要があるのではなからうか。奉仕を自覺し奉仕を目標として勤勞が捧げられたがゆゑに凡てが好調であつたといふことは、輕々に看過することの出来ない重大な意味を有するものであると、わたしは思ふのである。各自が勝手をいはない、我儘をいはない、そして絶対に捧げ切つた氣持をもつて各自の最善を盡すといふことは、凡そ人間に與へられた最も善美な姿ではなからうか。われらは幸ひに二日間の勤勞によつて、かういつた純美な性情、すなはち神にも通じる人間至上の靈性を發揮させて貰つたのであるが、よく考へてみれば、奉仕をもつて特殊の場合の特殊の行爲だと思つてはならないのである。

われらは一體何によつて生かされてゐるのであらうか。これは觀る角度によつて種々の答案が生れるであらうが、究極においては、申すも長き極みであるが、現人神に在します。天皇陛下の大御恵のまに／＼生かされてゐるのであることは改めていふまでもないことである。平常は目前のことに追はれて無反省に暮してゐるため、かういつた第一義的のことが却つて忘れ勝ちになつてゐるかに見えるのは、洵に申譯のないことである。けれども、ひとたび靜かに内省してみれば、

苟も日本人である以上、茲に思ひ至らぬものは一人もないであらう。まことわれらの一生は、廣大無邊な聖恩に酬い奉らむがためには、捧げても捧げても、なほ捧げ足りないものがあるのである。恐らく古今の大忠臣といはれたやうな人でもこれで十分聖恩に酬い奉ることが出来たとは、自分には思はなかつたであらう。とわたしは思ふのである。否、さういつた人たちは、一代を通じて自分の捧げることの如何に微小であるかを痛感したのではなからうか。でなければ七生報國などいふ氣持は生れて來なかつた筈ではなからうか。果してさうだとすれば、われらの如き凡人中の凡人に至つては、一生涯を通じて全身心を傾倒して奉仕しても、なほ聖恩の萬一に酬い奉ることは到底望み得られないのではなからうか。であるから、如何にもして少しなりともより多く聖恩に酬い奉りたいと、ひたすら謙虛に念ずるよりほかに、われらの祈りはないのでなからうか。われらの生命は聖恩によつて生かされて居るのであり、われらの生活は聖恩に酬い奉らむがための奉仕であるとするならば、われらの生存目標、われらの生活目標は、至誠をもつて大君に奉仕し奉るといふこと、すなはちわれらの校訓の至誠奉公といふことよりほかにはないのである。

かく觀じ來れば、このたびの特殊行爲のみが奉仕ではないのであるといふことが極めて明白となつてくるのであつて、凡そわれらの爲す四六時中の行爲は、勉強にまれ運動にまれ、一つとして奉仕ならざるはないのである。そしてそれが最も善美な形をとつたとき、前線の將士に見るやうな神々しい動きが生れてくるのである。われら凡人と雖も、自覺を深めて行爲を淨化してゆくならば、前線の將士のそれにも比ぶべきほどの輝かしいものとなるのが出来るのである。われらの日常の努力はこの一點に集中されなくてはならぬ。日々の生活が、刻々の生存が、そのまゝ奉仕になり切つたとき、茲に始めて眞個の生活が生れてくるのである。

## 二

このたびの修練會は、師と生徒とが寢食を共にするところに意義があつたのであるが、その宿所として多賀神社の神域を提供されたことは、われらにとつて仕合の極みであつた。かうした清淨の境に起臥することは、恐らく凡てのものが始めて経験したことであつたであらうと思ふ。

午前八時三十分といふに多賀驛前に集合し、服装を正し列を整へて多賀神社に向つたのであるが、そのときのあの力強

き獸の行進は、いま思出しても心が緊張する。鳥居をくゞつて、まづ携帶品を休憩所に置き、それから御手洗ミテラシで手水をつかひ、心の奥まで淨つた身を拜殿の前に整列し、玉串を奉奠して一齊に拜禮したときのあの清々しい氣持は、日本人ならでは有ち得ない尊いものであつた。三日にわたる修練會の偉大な成果は、既にこの一瞬に孕んでゐたのであらう。

第一日の夕は、七時三十分から大廣間で、先づ靜坐の行によつて正念工夫を凝らし、ついで教育に關する勅語を奉誦しそれから禰宜の大口さんから玉串奉奠の作法を學び、また祓詞や家庭の神棚拜禮などについて講話を聞いたのである。

神社に正式参拜するときは玉串を奉奠するのが例であるが、玉串奉奠の方法については一向心得てゐない人が多いやうである。いまそれを親しく禰宜さんから教はるることの出來たのは、洵にありがたいことである。玉串を奉奠しないときでも神社に参拜するときは勿論、家庭で神棚に拜禮するときなどは、いつでもかうした二拜、二拍手、一拜の禮法を守るのがよいのであらう。神を拜するとは神に至誠を捧げることであるが、かうした形式をとることによつて、至誠はよく表現されるものであるし、また至誠をよく表現しようとするれば、自然かうした形式が生れてくるのである。

「祝詞は神に申上げる言葉であるから、餘り大音でも、また餘り小音でもよくない。中音がよいのです。別段節をつけるといふでもなく、自然の氣持で讀んで下さい。」

といふ禰宜さんの言葉は、味のある言葉である。「神に申上げる言葉」といふ判りきつたことを忘れては、祝詞の意味は減却される。

講話が終つて、宮城遙拜、本社参拜、國歌齊唱の行。それから徐ろに就寢するのである。

### 三

第二日の朝は、屋内の清掃を了へてから、一同は本社に正式参拜するのであつた。爽やかな早朝の靈氣に浸つて、長くつゞいた社務所の廊下を——それは拭込まれて光澤のある、木の香床しい廊下であるが——その長い廊下を廻り廻つて、われらは靜々と歩みを運んだのである。手水場でひとり／＼手を淨めては、其處に備へてある白紙でこれを拭ふのであつたが、手とともに心の穢も拭はれて、心身順みに清淨を覺える。それから一同は拜殿に参進して三列に端坐する。やがて修祓の儀があつて、われらの魂はありとある罪穢から祓ひ淨められる。幣殿ではいま朝の祭がいとも嚴肅に執行されてゐる。祝詞の聲が縹渺として遙かに聞えてくる。神在しますの靈感を感じる。このとき級長は徐ろに立つて玉串を奉奠する一同はこれに和して、一齊に拍手する。何物の隔てるものとはなく、神に直面し奉つてゐるのだ、との強い感じをわれひとともに體驗したのである。

七月二十八日と八月一日には、月次祭が執行された。そしてわれらは、この祭にも参列することが差許されたのである。子供のころから、神社の祭に参拜したのは數知れぬほどであるが、かうした拜殿で祭に参拜したのは、全く始めてのことである。祭とは笛を吹き太鼓を敲いて賑かなものとはかり思つてゐたに、いま觀る祭の如何に森嚴莊重なることよ。今にして思へば、これまでの祭は、祭の餘興といつては語弊があるかも知れないが、餘興の方面のみを觀てゐたのであつて、祭の本體に親しく参したのは、汗顔の至りながら、このたびが始めであるといはなくてはならぬ。

あとで宮司さんに、朝の祭の森嚴さに打たれたことをお話すると、大和田宮司さんは莊重な語調で、  
「月次祭のときだけは、わたしども神官も、一所懸命ですよ。神に直々に對するのでありますから、それこそ生命がけです」

と述懐されるのであつた。さもありません、さもありません。

「拜殿のところに來たら、森嚴の氣に打たれて、身體全體がびり／＼と慄へました」

これは感想發表會の席上で述べられた、ひとりの生徒の告白であるが、純眞な生徒は、みなかうした尊い體驗を味つたことであらう。まこと神こそは現實在しますのである。そしてその神をよく見るものは、たゞわれらの至誠あるのみである。至誠なくして如何ぞよく神に直参することを得んやである。

朝の参拜を終ると、一同は宿所にかへり、宮城遙拜、本社参拜、國歌齊唱などの行を爲し、ついで彦中體操を爲し、それから朝餐の卓につく。七時三十分になると、靜坐の行、教育に關する勅語の奉誦、そして宮司の大和田さんから神についての講話を聞く。かうした場所、かうした時における、宮司さんの肺腑から出る言々句々は、そのまゝわれらの血となり肉となつてゆくかに覺えた。

### 四



ある日のことであつた。奥の松林の下を掘り起してはその土を笊でトロッコに運んでゐたときのことである。列を作つて笊を次々と手渡しに送つて行くといつた任組であつたが、それが慣れてきて面白いほど手際よく行つてゐたことである。そのときどうしたはづみか、一つの笊がトロッコ間際で不圖地に落ちて、中の土が全部地面に吐き出されて了つたのである。と、列中のひとりの生徒は、

「あ、勿體ない。」

と大きな聲で叫んだのである。如何にも勿體ないやうに強く叫ばれたそのときのその叫び聲と、その叫びを發したときのその生徒の眞剣な態度とは、今でも忘れることが出来ない。汗みどろになつて一所懸命に土をトロッコに運んでゐたひとりの生徒が、我知らず發したその叫びこそは、實に敬虔そのものであつたのである。

土は幾らでもある。盛んに次々と運ばれてゐるのである。それが、それなのに、如何にも惜しさうに、如何にも残念さうに、如何にも相濟まぬといつた風に、「あ、勿體ない。」と叫んだのである。純なその叫び、眞剣なその叫び、敬虔なその叫びに對して、そしてさうした叫びの發せられる背後の精神に對して、肅然として合掌したのはわたしだけではなかつたであらう。

わたしの子供のころは、「勿體ない」といふ言葉はよく使はれたものである。食事のとき御飯粒をこぼすと、必ず勿體ないと誡められた。紙を粗末にすると、これ亦必ず勿體ないと誡められた。そこでわたしの幼な心の中には勿體ないといふ言葉が極めて強く印象されてゐる。そしてこの「勿體ない」は「罰が當る」とか「目がつぶれる」とかいつた言葉と一緒に使はれることがよくあつたので、子供心にも「神」を聯想する言葉であつたのである。

確かに「勿體ない」といふ言葉は神或は佛と離れることの出来ない言葉である。勿體ないといふこと自體は、未だ必ずしも信仰そのものではないかも知れない。がこれは少くとも信仰への第一歩である。信仰の芽生である。隨つて神に或は佛に近づいてゐるのだといへよう。このころは、どういふものか、この言葉をあまり聞かなくなつてきて、心淋しく思つてゐた矢先き、圖らずも生徒のひとりからこの言葉を聞いて、本當に心強く思つたことである。神域に生活して、忘我の奉仕に懸命の努力を捧げてゐるとき、覺えず發せられた「勿體ない」の叫びは、決してたゞの叫びではない。それがわれらの心魂に徹しないでどうして措かう。げに神性こそは人間本然の性情なのであらう。

## 五

またある日のことであつた。降雨のため玉砂利運びが出来ないので、終日拜殿と、拜殿から幣殿に通じる左右の廊下とを清掃させて貰つたことがある。神の御前の神聖な場所を、布をもつて黙々と拂拭參味に入つてゐると、われらの心はおのづと敬虔な氣持に包まれて、何となく恐れ多いやうな感じがするのであつた。がなほも清掃に精進してゐると、そのうちに、不思議なことには、敬虔な氣持の奥から温い氣持が心のどこかに甦つてくるのを覺えたのである。神と親しみ深く感じて、何だか神がわれらと血で繋がつてゐる温いものゝやうに思へてきたのである。神は敬すべきものであり、同時に神は親しむべきものであるとの實感を、われらは布を通じて體驗したのである。然り、神はわれらの崇敬すべき神聖な存在であるとともに、またわれらと肉體的にも繋がつてゐる人間的な存在でもあつたのである。

## 六

このたびの修練會には靜坐の行を加へることとした。儀式の始めには先づ靜坐をする。勅語の奉誦に際しては先づ靜坐をする。食事に當つては先づ靜坐をする。といつた風に靜坐の行を中心にして心身を鍛鍊することとしたのである。

それでは行としての靜坐、心身の鍛鍊を目的とする靜坐とは如何なるものであるか。こゝにその要領を畧述しよう。靜坐をするときは、普通に坐るときよりも、膝は少し開いた方がよい。足はやゝ深めに重ね、臀はなるだけ後ろの方に突き出して、足の上に置く。腰を立て、下腹を膝の上にのせる心持で坐る。上體は眞直にして胸の力を抜き、鳩尾はひつこめるやうに工夫する。首は眞直にして頭を引く。兩手は軽く組合せ、肩の力を抜き、手には力が入らないやうにする。口と兩眼は軽く閉ぢる。かういつてくると何だかむづかしいやうであるが、實はこれが人間の自然の姿なのである。

姿勢はこれくらゐなものであらうが、肝要なのは呼吸の仕方である。呼吸は凡て鼻よりする。呼吸即ち鼻息のときはなるだけ靜かに、そしてその鼻息の音が自分にも聞えぬくらゐにして、出来る限り長く目徐々にはき出す。はくとき胸や鳩尾の力を抜いて、徐々に下腹に力を入れる。吸氣即ち鼻息のときは、息をすふといふよりも、僅かに腹の力を緩める氣持になると、自然に息は入つてくる。そして入つた息を、いまいつた要領で徐々にはき出し、同時に下腹に徐々に力を入

れる。力を入れるといふよりも、力が自然と入ってくるやうに工夫するのがよいのであつて、不自然に力を入れようとおせつたり、また力むだりしてはよくないのである。

如上の要領で呼吸を静めて臍下丹田に力を入れ、腹の人間にならうとするのが静坐の道である。毎朝毎夕、三十分間くらゐづゝ眞剣に修行を續けてゆけば、三年も経たぬうちに静坐の眞味は體得出来るであらう。

## 七

腹の人だとか、膽力のある人だとか、或は底力のある人だとかいつたことがよくいはれる。古來の傑出せる人物はみなかういつた臍下丹田に力のある底の人であつたやうであるし、また現今わが國で最も要求されてゐるのもかういつた人であるやうに思はれる。われらの修行も亦、終局においてはかういつたところまで行かなくてはならぬ。

ところで、如何にして腹を練るかといふことになると、それは容易の業でない。これが鍛錬工夫の方法も、決して一にして盡きるものでないが、静坐がその最も端的な、最も上乘な方法の一つであることは、改めて累説を要しまい。世界で最も腹の練れた國民は何國民であるかといへば、それは勿論日本人である。腹が練れてゐるといふことは、われら日本人の最も優秀な特質の一つである。これは遠い祖先以來のわが生活様式が招來したものであつて、疊の上に坐るといふことが最も大切な原因の一つであることは論を要しない。日本固有の修養法にして直接間接静坐と聯關してゐないものはないであらう。武道や禪はいはずもがな、作法にまれ、茶の湯にまれ、將た華道にまれ、その極致においてはみな茲に至るのである。静坐といふ言葉は使はないにしても、静坐といふ意識若くは自覺はないにしても、静坐の實體に觸れないのでは純日本式のこととは理解が困難であるといつても、敢て過言ではないであらう。それほど静坐は日本人にとつて肝要なものである。

然るに近時歐米風の生活様式が漸次多く取り入れられるやうになつたにつれて、次第に静坐から遠ざかる傾向の見えるのは、われらの最も遺憾とするところである。われらは日本の將來を思うて静坐の復興を絶唱したいのである。

このたびの修練會においても、静坐の行は、生徒には苦手であつたやうである。正しく坐る、心身を正しい姿に保つといつたことは、生徒には相當苦痛であつたやうである。暫く坐つてゐると、足が痛くなつてくる。雑念がひつきりなしに浮んでくる。これらの障碍を排除して静坐道に正念工夫を凝らすことは、可なり骨の折れることであつたやうである。が苦痛が大なれば大なるだけ、それだけ必要も大であるわけで、生徒はこの點についてもよく苦痛に勝へて、不退轉の行に邁進してくれたやうである。訓示のときや、講話のときなど、相當長時間にわたつてよく辛抱しぬいたのは愉快に堪へない。所得も決して尠少ではなかつたであらう。

## 八

静坐と並行して黙の行にも力を入れた。勤勞をするのにも、たゞ働きさへすればよいといふのではなく、黙々として働くことを念じたのであるが、これは極めてよく實行された。がや／＼と騒々しく働くのでは、行の働きにはならない。魂を打込んだ仕事だといへない。この點についても、われらは豫期に勝る成績を擧げたことを嬉しく思ふ。清掃のとき、食事のときなども、みなよく黙の行者たり得た。たゞ入浴のとき、休憩のとき、就床間際などは、黙を守るのに最も困難を感じたやうである。

人間は常住黙を守らなくてはならぬといふことは固よりない。語るべきには大いに語るのがよいのである。だが個人的にも、團體的にも、行としての黙、修養としての黙の價値は、如何に評價しても評價しきれないものがあることを忘れてはならぬ。

静坐と黙とは二にして不二である。相表裏して人間本然の力を培養する。現代生活が複雑化するにつれて、靜坐的の修行は益々必要となつてくる。日常の坐作進退の間、念々に靜坐の工夫を要する。勉強勉強。

## 九

このたびは勤勞奉仕といふ銘を打つての修練會だけに、玉砂利の運搬も山地の開墾も、相當能率のあがつたことは愉快でならぬ。だが靜かに考へてみると、われらとしては他のために奉仕する心算であつたに拘らず、實際には他から奉仕されたことの如何に大なるものがあつたか。

このたびの修練會が成功であつたことの第一の原因は、多賀神社の淨域に宿泊することが出來たことにあるは、言を俟

たない。居は氣を移すことの眞なることを、われらは體驗したのである。單に屈竟の宿所を提供されたのみならず、宮司さんを始め神官の方々が、恰もわが子に接するがごとく慈愛をもつて懇切にお世話いただいたことは、まことに感銘の至りである。神社が敬すべき場所であるとともに、また親しむべき場所であるとの印象を腦裡に深く刻むことの出来たのはありがたい仕合である。

多賀小學校にお世話になつたことも、筆紙のよく盡すところでない。校長先生を始め平等先生やその他の先生方が當初の計畫以來何くれとなく配慮いただいたことは、實に甚大なるものであつた。その上日々の食事は、家事の先生指導の下に女子青年學校の生徒さんたちが心をこめて調理してくださつたのであつて、そのお蔭をもつてわれらは何の心配もなく日々の修練に精進することが出来たのである。多賀村の役場の方々からもまた、一通りならぬ御恩を受けたのである。かう考へてくると、勤勞奉仕などと大きな聲でははれた義理でないやうに覺える。それほど大變な御恩を、われらは種々の人々から受けたのであつて、さうした御恩のお蔭をもつて修練會が意義深く終始したのである。こちらで如何に奉仕しようと思つてゐても、奉仕することの如何に些少にして、却つて他の人々から奉仕されることの如何に絶大なるものであるかを、われらはつく／＼と味つたのである。奉仕しよう、奉仕しよう、只管奉仕を念じて生活してゐるときですらこの通りであるとするならば、奉仕などといふ事を忘れて了つてゐるときはわれらの生活は、果してどうなつてゐるのであらうか。反省してみなくてはならぬことである。凡そわれらの生命は他によりて生かされるものであり、われらの生活は他に奉仕するにあるものであるから、われらの日々の生活がそのまゝ奉仕になつてゐる場合においてのみ眞個に正しい生活だといへるのである。隨つて奉仕即生活、生活即奉仕の境地がわれらの理想の境地だといはなくてはならぬのである。

○  
擱筆するにあたり、  
このたびの修練會において、  
お世話になつたあらゆる人々に對して、  
満腔の誠意を披瀝して、  
感謝の意を表します。

### 更に努めよ

尾田鶴治郎

今日の世界は、その明日に於てどう決定されるかはわからぬ。恐らくこの現實に於て、誰も明瞭に之を説明しては呉れない。

聲の時代、宣傳とデマと外交と勝利と叫び泣く哀訴と不平と奮激と、なほ聲の混沌にあつて次代がどう形化されるかは未割のまゝにただ混亂してゐる。

今や、日本も大陸も、そして歐洲も——全世界が一つになつて大きく動き始めてゐる。新しい世界の歴史が創り出されようとしてゐる。

大いなる時代——が、生れようとする。  
見よ、

興亞の春、悠久紀元二千六百年を迎へての日本の大理想、これもその一環である。主動的な一角に位置して大日本帝國の聖業は肇まる。若き日本の歴史は出發する。大いなる希望と緊張の中に。

日本は既に業に太平洋上の一島帝國ではない。日本は今日までと地位も持場も新しくなつた。日本は大陸と一つとなつた。東亞大陸は日本の中へ入つて來た。我々の一人々々の生活の働きの中へ東亞大陸が入り込んで來てゐる。それが今日の常識であり事實である。

所謂八紘一宇、燦として希望は輝く大八洲といふ。興亞の大業は日本の政治と歴史との中へ織込まれて來てゐるのだ。大いなる時代、若き世界、——の出發として、既にスイツチは入れられてゐる。ヴァイブレーションは起つてゐる。興

亞々々といふ電流が日本人の一人一人の誰もの體内を流れてゐる。  
この時である。

皇曆二千六百年。意義ある年は来た。祝福さるべくより以上に大切な時代、激しい時代の勇者として日本は映し出される。壮大な日本の再出發。洋々として多幸なる前途を約束されてゐるとは言へ、これから始まる仕事こそまことに重大なる出來事の連続と見なければならぬ。世界史轉換の史代樞軸として新世紀の光華と責任とを鮮明に負擔すべき新日本として――。

大陸への突出は日本の生活の單調を破つた。これは、歴史の必然であり、事勢の壓力である。それだけに日本は多面多角の活動を躍進を以て世界の上に打出さねばならぬ。

皇曆二千六百年、今日現下の日本を觀する時、乃ち大いなる幸、大いなる慶びと感ずる以上に正に洵に重大難なるそれと痛感すべきである。

今日の世界の國民について、どの國民が幸福である、不幸である。偉大であるとは言ひきれない。その共通して言ひ得ることは世界のどの國民もが人心として不安定の感にあるといふことである。この間に於て、たゞ日本國民のみが、幸福であり、偉大であり、従つて日本國民のみが人心の安定感を得てゐる。これは事實國民共通の感情として理知として信念として當然許さるべきであるが、信を往くものは常に之が實を行ふことを忘れてはならぬ。その知に於て膨脹するものは往々にしてその實は虚なる場合も生じる。天業恢弘を理想とし、世界人類の幸福を道とする日本の前途に關しては寧ろ之が多艱に備へて眞個の國民實力養成に専心し一意して現實に處すべきが急務とせなければならぬ。今日日本國民をして幸福ならしめ偉大ならしめ、人心安定感を保證せしむるものは一に偏にこの實力の把握である。

力、力、而してその力とは何ぞや。

既に物資の力が問題となつてゐる。金が經濟力が問題となつてゐる。國力の基盤としてこの方面が警戒もされ統制され準備され充實されつゝある。而し私のこゝに謂ふのは物の力金の力ではない。これらの力を左右する智慧の力、精神力、更に國民体力の上に於てある。物の力、金の力は計算の出來る、形のある有限の世界に於ける力である。これは到底學徒の領分ではない。學業期青少年の側ではない。私の諸君に謂ひたいのは、物の力、金の力ではない。之を産み、之を左右する原動力となる知力心力――物理學者では計算の出來ない有限世界に於ける無限の力である。小さな頭腦といふ發電所から出る不思議な知の力、小さな心臓といふ發電所から出る不壞の心力、その無限と確乎を健剛なる體力に盛つて報

效のため今日に準備し應動すべき國家的所要を謂ふのである。

いくら働いても働くに甲斐ある時代と、否らざる時代とがある。今日ほど人間力の有効に必需に働き働き上げうる時代はない。求人が、技術が、智能が、體力が全世界に亘つてどんなに切實熾烈に要求されてゐることか、諸君は實に之を個人的側からみても、よき星の下に生れ合せたものである。然り而してこの時なるが故に諸君の力の限り根限り有効に働かねばならぬ時である。進取無限の働き甲斐のある幸福なる時潮に感謝して可能性の最大に於て自我を實現するの念慮は夢寐にだも忘れてはならぬ時である。

が、私の諸君に訴へるのは未だそれではないのである。今日に於ては諸君は、諸君の努力を精進をかうした個人的幸福の上から打算するでなく、國家といふ大我の側から、今日の努力を研究を積極的に突き進め、價值つけて行くべきを謂ふのである。報國の實踐として文句なしにたゞ努力し努力せなければならぬ意味である。諸君の時間を、努力を、寸分のムダなく國力啓培の意味に於て現下に動員して有効に努力せなければならぬ國家の秋である所以を謂ふのである。自分自身の幸福を築く基となる底の普通の意味の努力でなしに、皇國のために、常住以上、人間以上の一倍も二倍もの努力を拂ふことを謂ふのである。

その如何が、世界の今日に於ける日本の運命を左右する大きな國力的成功不成功の差異を生ずるが故である。

意志に鞭打て、身體に力めよ。と。

何を努力するか。青少年期は即ち學業期である。學業の現行に嚴修勉せよ。何を努力するか、青少年期は身體の發育伸張鍛鍊期である。體力をこれ造就せよ。更により根本的なるは興亞期成の不屈不撓な國民的精神である。と。かう實踐問題として列擧すれば極めて簡明である。要は現實への努力である。たゞそれ汝の表情を時代的に改め、汝の實態をこゝに打成せよと、即ち眞理は平凡の如くにして、問題は内質のイリタビリティーに關する。勉めよや。

大いなる時代、若き世界、そしてあるべき日本の位置、國力の涵養、かう考へて來る時、期待の熱情は新人にある。次時代人にある。明日の支持階級にある。健康なる身體と、力強い精神と――その健康といつても、病氣をしないだけの健康ではない。激しい働きの中、困苦の中、ピクともしない、逞しい頑健持久の體軀の鍛鍊である。精神の方面にして活學活知の應用無限の才分、創造的精神、不倒の意志のそれではなければ興亞の大業は荷ひきれぬ、世界の日本は創り出

せぬ。之に即應する今日以上に一段と高度の精神であり身體であつて、一億國民の皆んなが揃つてそこに至つて始めて情勢混沌未割の世界像を整理して真日本の創造體制を明徴化し得るに至るものと私は信ずる。

政府の當局や一般有識はこゝに着眼し、よき次の世代を育てるために色々な政策や理論を以てしてゐる。世の家庭の父母兄弟も亦この道の正しい解決につとめてゐる。が、根本は個人の自覺の上に反省と努力の上にある。政府、家庭の方向に應動し、更に自動自慣して相率ひて之に至らしめねばならぬ。これ即ち至誠奉公の平常道である。

勉めよや諸君、將來の日本と大陸の、かぎりなき繁榮と幸福とを創り出すために、若き世代の優秀として打出づるために、現實に力めよ、紀元二千六百年に生きる最大の方向は、課題は、之がためにする何よりも逞ましい健康な身體の鍛錬と、雄々しく強力な精神と正しく深い科學的知識の涵養との上にある。

曠古の時艱に際し、昨年長くも青少年學徒に賜はりし勅語の御聖旨を奉體し、統後精神強調の重大性を想ひ、卓越せる國民的道義の支持、確然たる國民的實力の發揚の關するところ一に諸君、若き日本の准第一線戰士としての諸君にあることを痛感して、特に現實の分擔に精勵傾倒すべき一事を要望して止まない。銘記せよ。たゞ奮勵せよ。諸君の實力はそのまま日本の實力である。



### 生徒作文

#### 御親閱を拜受して

五年 西島 寅次

五月の空は愈々清く碧空燦々たる陽光は若人の血潮に注ぎ薫り高き初夏の風は千代田の森にそよぐ、待望の五月二十二日。

宮城外苑の聖域に整然と集ふ三萬二千五百の學徒を見渡せば爛漫たる綾錦を織りなす千紫萬紅、色とりどりの校旗は燦たる太陽に映えてきらきらと天空を截ち此の壯觀に我等は均しく、御氏吾生けるしあり天地の榮ゆる時に遇へらく思へば

との感に切實に打たれたのである。

午前九時五十五分囀鳴たるラッパ一聲大内山に響き渡つて、天皇旗を先頭に鹵簿肅々と今や鐵橋を渡らせられる 御英姿に自ら頭の垂るるものを感じつゝ、同十時、軍樂隊の奏樂「君が代」に移るや 陛下には二重橋前廣場中央御親閱の御臺上にお立ち遊ばされ、此處に於て我等は心からなる敬意をこめて捧げ統の禮を行へば萬感胸に迫り青春の血潮は高鳴り濺刺として軒昂の意氣天地に満ち溢れる許り。

かくして十時三十分我等彦根中學校生徒は行列の發起點に到着し直に行進に移つたのである。新しく賜つた御親閱拜受章は純白の一中の校旗と共に和やかな風にひら／＼とはためき、帽影劍光一として乱れるものなく銃後若人の意氣は颯爽たる靴音に表れて躍進日本の鼓動を物語るが如く——やがて「頭右」の號令により我等は玉座に向ひ彦根中學校九百の魂をこめて、盡忠報國の赤誠を捧げ奉つたのである。分行行進の後我等は更に荒木文相の「天皇陛下萬歲」の聲に従ひ天地も割れよとばかり陛下の萬歲を壽ぎ奉つた。時に十時四十五分。

恐れ多くも龍顏を御間近に奉拜し而も今度下し賜つた優渥なる勅語即ち  
國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繁リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ

と宣はせられた寂慮のほどを拜察して、限らない感激に涙すると共に聖恩の萬分の一にも報いんと「氣節ヲ尙ビ廉恥ヲ重ンジ」との御訓に従ひ、來るべき日本を以て強く背負はんと熱に誰しも燃えるのであつた。

感激の御親閱拜受は終了し、午後零時三十分我等は靖國神社に向つて武裝行進を開始した。晝食時の市民の波は我等の行進に沿うて見送り、我等も亦旗鼓堂々と時局下青年の覇氣を示しつゝ、むせかへる初夏の太陽を背に受けて九段の坂、靖國神社に参拜したのである。鬱々蒼々と生ひ繁る松杉と巍然たる幾つかの銅の鳥居の下に、日清日露の戦を始めとし或ひは今時事變に新東亞建設の拿き礎となられた我等の先輩に、そして又あの懐しい千原先生を思ひ慕ひつゝ唯一時の捧げ銃に万感の胸中を披瀝し、心は残るものゝ止むを得ず軍神の御魂の下を立ち去つたのだつた。

かくして唯感激裡に御親閱拜受の天命を彦根中學校九百名のものとして無事終へることが出來た。而して此の間最も強く私の心に浸み入つたことは、「我等は日本人である」との誇であつた。「我等は日本人である。我等は陛下の赤子である」といふ誇を今更の様に痛感すると同時に「大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ」との信念が尙一層強く身に、血に、肉に浸み渡るのを感じたのである。

そして此の御親閱拜受の光榮こそは、我等の一生涯を通じての、叱咤激勵の良き指導者となることを深く信じてゐる。  
昭和十四年五月二十二日

恩光に浴し、恩詔を賜ふ。終生忘れ得ぬこの日。この感激——。

## 健康を論ず

五年 坂 田 保

凡そ吾人が健康である時程日々の生活が愉快なものはない。健康でさへあれば假令生活に如何なる困難な事が生じても此を乗り切る事が出来る。我等中學生に於ては健康であつて初めて専心に勉學に勵む事が出來、精神の修養に人格の陶冶に力める事が出来るのである。

而も聖戰が長期建設を必要とし、興亞の新秩序建設の段階に達しては國家の要求する人的資材の上からも國民總てが健康であらねばならない。就中將來の日本を背負ふべき我等中學生にとつて健康保持は重大な義務とさへ思はれるのである。我等は須く是を自覺し將來に於て悔を残さざる様健康増進に力を致すべきである。

それが爲には日々の生活を規律正しくし、常に日光と新鮮な空氣に接し、姿勢を正しくして身體各部の諸器官の機能を容易にし、皮膚を鍛錬し、食物に注意して榮養物を攝取する等一舉一動總べて健康に留意する一方、進んで積極的に運動の方面に身體を鍊磨して如何なる肉體上の困難辛苦にも耐へ得る身體を造るべきである。

斯くしてこそ常に健康の中に生活を樂しみ、將來日本の中堅國民としての使命抱負に一意勇往邁進する事が出来るのである。千載一遇の聖戰に際會し、健康の故を以て光榮なる参加を抛棄したり、逡巡したりしてはならぬ。我等中學生は潑刺たる健康を以てする、伸びゆく日本の象徴としての學生であらねばならぬ。

## 参拜旅行日記

五年 河 崎 敏 男

六月二日

新録したる六月二日。我等を乗せた汽車は、汽笛一聲金龜城下彦根の町を後に西へ西へと進む。草津で乗換へ、参宮快速

車によつて一路神都宇治山田市へと急ぐ。伊賀越。——鈴鹿の山々のそびえつ中を縫ふが如く鈴鹿川に沿ひ、拓植を過ぎ、龜山に着く。此處から草津線は參宮線となる。津、松坂を経て午前十一時十六分山田に着く。驛前から鋪裝した大通りを進み、先づ外宮豊受大神をおろがみ奉り、外宮前より内宮前迄電車。國神伊勢大廟に詣でる。神域は樹々鬱蒼幽邃にして新緑神苑に滴り、參拜の人々の夥しきをよそに、崇高森嚴の氣満ち、神の鶏のおちこちなるも、太古の様の偲ばれる。五十鈴川の清冽に口漱ぎ、手を清め、肅々と神前に進み、外宮同様皇軍の武運長久、國威宣揚を心より祈り奉り、終つて緑深き神路山、宇治橋を背景に記念の寫眞を撮り、引返して電車にて宇治山田に向ひ、午後二時此處を後に參宮急行電車で、次の旅程樫原に向ふ。明野ヶ原飛行場を右に、櫛田川を渡り、松坂を経、伊賀盆地を西へ西へと進み、幾つかの長いトンネルを過ぎて、大和高原に入り、八木に至り此處にて大軌吉野線に乗換へ、午後四時前樫原神宮前驛に到着した。驛から見ると畝傍山は左に、八紘舎が數棟列んでゐる。此の邊は廣々とした外苑となるのであらう。と想像しながら參道を進む。神宮は目下工事中なので、右より神苑に入つて參拜した。神苑はまだ木も繁つて居らないが、此等の多くの木々が繁げる時は、如何に立派な神域となるであらうと思ひながら假殿に頼いた。左に改築されつゝある御社殿を拜する。やがて我等はこゝ聖地樫原を去り、更に行を急いで午後六時過ぎ吉野に着いた。驛前にて修驗者の一團が後を追つて降りて来る。大峯山の行者であらう。七曲り坂を登つて旅館さこやに入り、こゝで目まぐるしかつた一日の疲れを癒した。風呂に入り夕食をすまして旅便り、旅日記等をしたため、午後九時半點呼を受けてたのしい夢路を辿り、故郷遠き吉野の町に一夜を明かした。

六月三日

起床は午前四時半と定められてゐたが、午前三時前後にはもう目を覺した。さわがしく洗面してゐる者もある。四時過ぎにはもう大抵の者が床をはなれてゐたやうであつた。顔を洗ひ、欄に凭れて、残月をなつかしみつゝあたりを見廻した。今朝は相當ひや／＼としてゐる。五時過ぎにはすでに朝食をすまし、正装して表通りに出てゐた。有名な奈良の大佛を鑄造した餘材をもつて造つたといふ鳥居の前、或は旅館東玄關のところなどをカメラにおさめ、午前六時全員集合、宿の人に案内されて吉野見學に出かけた。山道を登り、仁王門をくぐり、吉野皇居趾に詣る。この地、延元の昔五十餘年の皇居のありしところ、後醍醐天皇の崩御、後村上天皇の御即位式、正行が決死の參内等、折から櫻の葉にあたる風の音もはた／＼と、昔時の夢を語つてゐるかと思ひ起しつゝ、感慨無量なるものがあつた。此處を辭して藏王堂に參詣する。境の四本の櫻は大塔の宮が最後の酒

宴を開かせられた所、「村上義光忠死の所。」ときざまれた石が一基あるのみである。其處には二天門といふ門があつて、此の樓上に於て義光は大塔の宮の御鏡を賜り、宮に代つて自刃したと聞き、王室に對し奉つては身を以て殉ずるの臣道に心を深くし足早めて道を登り、勝手明神に參拜した。何處からか靜御前の法樂の舞のひびきがして来るやうに感ぜられ、更に登り行く途中、竹林院を右にしやつと左に有名な雲井櫻を眺めて水分神社に參拜した。此處にて一寸休憩して、吉野杉の林をぬけるやうに曲りくねつて下つて行つた。下つたところに如意輪寺がある。先づ後醍醐天皇の塔尾御陵に參拜する。古陵松柏亭々として、昔を物語るかの中を、參拜してへて正行の「かへらじと——」の歌を思ひ起さしめる如意輪寺に詣で寶物を拜觀して後、中の千本を右に勝手明神の横を経て、後醍醐天皇をはじめ奉り、楠正成、僧宗信を合せ祭つてある吉水神社に參拜、再び藏王堂に入り記念撮影後、旅館さこやの前を通り、黒門をくぐり、昨夕登つた七曲り坂を右に下つた。途中左手に小高い丘があつて、その中央に苦むした塔がある。此れが村上義光の墓である。詣でて更に山道を日にてらされながら下り、木の香もあたらしい吉野神宮に參拜した。祭神は後醍醐天皇。白木の宮居の神々しさに崇嚴の感にうたれつゝしばらく休憩する。聞き及ぶ信貴・葛城・金剛の山々もぼうつと霞立つてゐるが、此處から見ることが出来た。吉野をあとになだらかな坂道を下り、吉野神宮驛前に着いたのが午前十一時。同二十五分の電車で吉野口に至り晝食をしたため、午後〇時三十二分發にて和歌山線に沿つて一路法隆寺に向つた。御所の邊りで葛城川を渡り、高田を経て一時二十分王寺に着き、待ち合すこと二十五分許り關西線に沿つて進み、三室の山の紅葉を思ひ起しつゝ一時五十一分法隆寺に着く。下車。麥畑の間を歩むこと約二十分いよ／＼我等の旅行最後の目的地たる法隆寺に着く。伽藍を拜觀する。五重塔金堂の立派さ。夢殿を見んものと東大門をくぐり四脚門を入ると、惜い哉夢殿は今工事中で心あてにしてゐた世界一の九輪と露盤との調和を見る事が出来なかつたのが遺憾であつた。かくて午後三時五十六分法隆寺を後に、郡山を経て奈良に着いた。此處にて四十分餘り待合せ、午後四時五十八分奈良をあとに木津川を渡り、宇治の茶畑を車窓に眺め、桃山を過ぎ、六時六分京都着。ホームで夕食をとることゝなつた。折から態々こゝまで訪ねて来てくれた、本校出身三高の上杉西川の兩君と久し振りで話を交し、間もなく我等は歸彦の途についた。即ち六時五十九分汽笛と共に京都をはなれ、車上たそがれの琵琶の湖瀬田の流の趣を愛し、各驛にて下車する友を見送りつゝ、汽車は八時三十四分彦根に歸着した。こゝで多くの友達を下車。さよならを交し、私はそのまゝ米原に延し、北陸線に乗り換へ八時五十八分無事長濱に着き、多くの土産話を家苞として懐しのわが家に歸つた。

## 近江神宮に勤勞奉仕して

五年 橋村節治

八月四日、五年生奉仕隊は、縣民齊しく仰ぎ奉る 近江神宮の御造營にと心を清め出發した。八時四十分、工務所脇に集合  
定め、式を擧げて九時から作業を開始した。時に訪れる微風はあるけれども、ざらざらと光みなぎる炎天下に、他校の奉仕隊  
に劣らじと、赤鬼魂の限りを鍛にこめて働いた。やがては出來上る巖たる神苑を夢みつゝ、岩の様な土を、一塊また一塊、一  
塊又一塊と、明日の日本を背負つて起つ青年の意氣と情熱とを以て掘進んだ。

見ると先生達も一所懸命我等と共に泥汗を流して鍛を手にし或は脊を擔つてゐられる、尊い姿だ。

やがて、暑さも稍柔ぎそめた頃、一日の聖なる奉仕も無事終了した。我等が滋賀の宮——この光榮ある意義深き勤勞奉仕を  
無事に務めあげたのだ。體のどこかを響きをたて、歡喜の血潮が渦まくやうだ。私は此の近江神宮が、日に月に竣工に近づ  
くを見る時、すめらみ國が月に榮え日に伸びてゆく姿をそのまゝに思ひ浮べる。我ら青年學徒の汗と努力の結晶によつて、か  
くして我が帝國の理想が實現し、不動の國礎が固められるのだ。我らは聖なる奉仕をする度に、日本の將來と第一線の將士に  
對する感謝の念とを新たに祈るのである。

願はくば此の汗の、小さき汗の玉が、展げゆく日本の礎石たれよと——。

## 現代中學生の覺悟

五年 松田又一

内に外に建國以來の難局に當つてゐる現代日本の姿は、そして世界平和の爲に斷乎として行ふその行動は、眞に古今の青史  
に獨歩すべき英雄的努力である。

この多端なる時局に、而も青年として生を享けた我等は何を覺悟せねばならないであらうか。餘りにも急迫した世界の情勢  
に稍々もすれば自己の姿を失はんとする我等は、努めて冷靜に自己を保持しなければならぬ。我等は此の時局に息づく若人と  
して、時には前線にある忠勇なる皇軍將士の姿を思つてはじつとしては居られなくなる。だが然し、我等は未だ學業半ばにあ  
る青年である。我等は學生としての本分を全うすること、それ以外に何物もないのである。

然しあの世界大戰に於ける歐洲の各國大學の學生の大半が、銃を手にして戦線に立ち、護國の鬼と化した事實は忘れてはな  
らぬ。それには强健な肉體力と金剛不壞の精神力の鍛鍊に努めねばならない。

我等は徒らに血氣の勇にはやつてはならない。世界に於ける日本の立場を現在に於ける祖國日本の國內の狀勢を冷靜に考へ  
而る後に自己の立場の重大性を意識しつゝ日々の學業に専心すべきである。

## 自己を語る

五年 池田敏之

怠惰！ 心深く食込んだ悪魔、希望に燃える青春を悔と涙に置く悪魔、蝕まれた若木が洋々たる前途を前にして枯れて行く  
如くに……。

いまましい。間違つた人生觀を懐かしめた怠惰の心。世の中を甘く見せびらかせた悪魔、人生を樂觀視させた悪魔。そし  
て自己は今この怠惰の俘虜となつてゐる！。自分は嘗て「まよ明日もあるから」などと怠け心に甘えてゐた。幼き日には勤  
勉努力して學問に精進した日もあつたのに、今は怠惰に制せられて、光を求めて漂ふ難破船のやうに、希望を求めて徘徊する  
哀れな姿となつてしまつた。さうした悔に日を送つてゐるのが己の現狀である。

然し何時までも此の様にしては居られない。人生は長くて短い。輝く人生を思ふと一日も早く現狀を打破しなければなら  
な



顧みれば人的資源に憐む日本の今日に於て、己の今日のこの態度が許されるだらうか。起たねばならぬ。奮起せねばならぬ。断だ。断だ！ 今日からでもいゝ。國の役に立つ人間、時局の萬分の一でも擔へる人間になりたい。幸にも己は健康に恵まれてゐる。此の腕を此の足を大地に踏張つて起ちあがらう。若き此の力に無限の信頼を置いて――。

## 學林集團勤勞

五年 山 本 定 司

我々彦中生二十名は今年の七月二十八日より四日間即ち七月三十一日まで東淺井郡東草野村の縣所有の學林に於て學林集團勤勞を行つた。自分はその時まで學林があるといふ様な事は思ひもよらなかつた。そしておそらく他の大部分の學生も之を知らなかつたのであらうと思つて居る。然し自分は東草野村の山深く入つて人里遠き所に杉、檜の大きなのが所せまきばかり青々と茂つて居る立派な、未だ嘗つて滋賀縣で見た事のないやうな山林が目に見える限り續いて居るのを見て驚かされ、次にこれが縣所有の學林であつて我々の學校の財産であると聞いて嬉しくもあり、たのしくもあり、そしてこの山林に對して心からの愛護の念がこみあげて來るのを感じ、又此の山林を他の生徒に見せてやりたい様な氣が起つて來た。

途中の行軍！ それは今でも忘れる事が出來ない程へたつてしまつた。さて小屋について果して作業が出来るか、よし出來たとしてもはかどるか心配せざるを得なかつた。あの七廻り峠の難關自分は自分自身の荷物さへ苦しかつたがその上に四日間二十人分の食糧を二人づつが持つて上るのだから途中の行軍は非常に苦しかつた。然し自分は何糞と頑張り遂に海拔四百十三米の頂上に來たのである。「頂上だ！」と誰かが叫び、上から「おーい」と先着の者が叫ぶ。此の時の喜びは實に形容し難い深い喜びだつた。此の喜び！ それこそ、その苦しみを味はつた者でなければ分らぬであらう。又吉靨を出發して最後の目的地の小屋まで向つた。此の間一里と一寸、である。要した時間は約二時間、道は山の中としては平坦な方であつた。然し荷が重いので行軍は相變らず苦しかつた。その苦しみを慰さめてくれるのは溪流の清き流れと愛すべきそのせゝらぎの音であつた。どこまで行つてもサア！サア！と俗界を離れた谷川の清い美しい音は果てする事なく續いて居た。既に一時間以上た

つてから縣のお方が「あの山の谷を二つ越えれば小屋です」と言はれた。僕は「もうすぐだ！」と思つて手に持つ重い荷物も軽く持ちあげた。間もなく第二の谷と思はれる谷を越えた。小屋はあと百米も行かなくてももう直ぐ小屋だらうと思つた。然し行けども行けども深い山林ばかり、道が廻つて居る。今まで木々の間から空は見えなかつたが、道が廻つて居る所へくると空が木の間から明るく笑つて居る。道を廻れば小屋だらうと思つた。その時はもう手の握力は遂に消耗してしまつて重い荷物はいよゝゝ重くなる。その道を廻る。然し小屋だと思つたのは適中しなかつた。僕は失望した。おまけに道はやゝ上り坂となり息は切れる苦しくなる。然し再び「何糞つ！ こんな位でへたばるかつ」と思ひ直して再び大地をふみしめて進んだ。が間もなく手はだるくなり足はともすれば千鳥足となり息は切れて益々苦しくなる。かくする事十數分、然し此の十數分は僕に取つて忘れる事の出來ない長い長い時間だつた。遂に小屋に到着——いやどちらかと言へばやつとたどりついたのであつた。此の時の喜びは實に七廻り峠の時以上だつた。自分は手に持つ荷物も肩の荷物も投げ下して、來た道を逆もどりして下の方へとんで行つた。つかれも忘れて！ として「小屋だつ！ 小屋だつ！」と叫んだ。下方に僕の様によつぱり難行軍を續けて居る戦友(?)がにはかに活氣づいたのが目に見えた。此の行軍！ 自分は此の行軍によつて自分の體力が解つたと同時に如何なるものでもやる、といふ氣持さへあれば如何に苦しくとも成し得るといふ確信を持つた。此の行軍こそ苦しくはあつたがそれは尊い經驗だつた。

當日即ち七月二十八日は雨でもあつたし又時間がおそかつたので作業は止めとなつた。「明日から作業があるんだ」と思つた僕は、ニユーの鎌と鉋とを持つて來た、その試し斬がしたくてならなかつた。腕が鳴る！ 翌日朝早くから起きた。昨日の行軍のつかれも忘れ、二十九日は誰れもが「何んな作業であるか？」と期待しつゝ朝の式はおごそかに人里はなれた山奥で進んで行つた。「君が代」合唱裡にしづ〜と太陽と共に昇つて行く日章旗、その光景こそ實に莊嚴そのものだつた。やがて作業に對する注意等があつて我々は作業場へ行つた。作業場は一番近い所だといふ事だが小屋より約半里は行つたであらう。途中の坂は急坂だつた。下を見れば自分達の昨日來た道は細く林の中を迷つて居て谷川の音も次第に遠くなつて行く。ふと南東の方を見れば海拔千米一寸といふ高い山が朝霧につゝまれて朝日に輝いて居る。向ふの方の高い山も學林だ。青黒い檜が山の蔭の所でこんもりと茂つて居る。實に雄大な光景だ。さて「小屋は？」と下を見ると、おー！ なんと美しいそして嚴かな光景だらう！ 日章旗だ！ 丁度山と山との谷の所に白地に日ノ丸の旗がくつきりと青い山を背景にして浮んで居るではないか

！。そしてしかもその日章旗は朝日に輝き朝風になびいて居る。自分は我を忘れて見て居た。われらの小屋はその日章旗の近くにあつた。

二四

作業開始——いよ／＼作業開始だ。道は峯に並行して居るらしくその道から峯まで灌木を刈つて行くのだ。作業は一口に言へば簡単だ。然し灌木は普通の草の様な生やさしいものではなく足のふみ入れ場も無い程茂つて居る。そして仕事はあまりはかどらない。最初はさほどに苦しいとも思はなかつた。一人が二米ぐらゐの幅を受持つて上へ上へと刈り上つて行つた。最初は叮嚀に一本一本刈り、一寸太い灌木は鉈でやつた。然し時間がたつにつれて次第に疲れを感じる様になつて来た。手もそろ／＼痛くなり、一本一本刈るのもどかしくなつた。大量的に刈る様になりそれに正比例して力が要る様になり、又疲れが大きくなる。かくする事一時間ばかり手の速いのがもうだいたいぶん上の方を刈つて居る。そして「峯だ」と叫んだ。「峯？」と思つて前を見ると灌木の葉と葉との間から青い空が見える。あと二間ばかりで峯だと思ふと益々木を刈るのがもどかしくなり、速く峯へ出たい／＼といふ氣が出て、次第に仕事は乱雑になる。そして峯へ行けば行く程堅い大きい灌木が多くなり、仕事はますます／＼困難となり、ますます／＼氣はあせつた。かくするうち遂に峯へ到着した。汗だらけになつて。その時の喜び、これも又大きな大きなものであつた。峯の景色は美しかつた。小憩の後下の道へ下りて行つた、道より上を見れば今迄青々と茂つて居た灌木の葉はすでに力衰へ力無くうなだれて居る。そして今まで木の間から空が見えなかつたのが、空が檜の木を通してちらちらと見えるのがわけも無く嬉しかつた。空が見える！。あと二回ばかりして晝食となつた、晝食は實に美味だつた。米は上手に炊いてあつた。愛刀——いや愛鎌をかたはらに置いて。然し鉈は結局邪魔物であるといふ事がある時の皆の感想であり、鉈は二三名だけ持つて居れば充分だといふ結論に達した。午からは皆鉈無しで鎌ばかりで行つた。鎌はよく切れるので氣持がよかつたが、亂雑に取扱つた爲か鎌は月蝕か日蝕の如く欠けてしまつて果ては「ノコギリ」のやうになつてしまつた。かくして何時頃だつたか作業は終了した。そして再び半里ばかりの道を家路に急ぐ農夫の如く急いで小屋へ歸つた。作業は苦しくはあつたが又楽しくもあり夕食をすまして夜早く寝た。夜は月夜だつた。

三十日、やはり同じ作業だつた。峯へついた時の喜びはやはり前日と變らなかつた。再び昨日の作業場へ来た、それから今日の作業場へ行く間、北の方の山林の灌木は綺麗に刈られて北の方の空が美しく目に映る。上を見れば空はよく見えるが林の中を通してな／＼め上の空を見る時、「昨日は灌木の爲見えなかつたが、皆が刈つた爲林の中を通して空が見える」と思ひ、

そして昨日と同じ様に嬉しく思ひ、今日も灌木を刈つて空を見ようとつまらぬ希望を起して作業をした。今日の作業はそれほど苦しく無かつた。ただ手に豆が出来たのが癢だつた。歸りは再び同じ様なつまらぬ悦びに入つて居た。そして今日でもう此の道を通らない。そしてもう此の山へ来ないと思ふとなんだか淋しく思つた。明くる三十一日の作業は道の草刈りだ。今日限り此の道を通らないと、昨日今日の作業の意外にはかどつた跡をながめて思つた。小屋への歸途はやはりたのしかつた。小屋では便所の臭みがぶ／＼とした。便所をどうかならんのかなあ！と思つたりした。三十一日は我々に取つて最後の日である今日は草刈りだ。今までと方向違ひの道の草刈りだ。草の根本を拂へば草はばた／＼と支那兵の様に倒れてしまふ、力の殆んど要らない仕事だつた。一寸氣抜けがした。作業を終つて歸途につく。やはり家はなつかしい。四日目にはじめて見る吉槻の人家はなつかしい。

今度の學林集團勤務に於て自分、いや全部の者も無言の内に此の事變下に、此の廣い學林を道場としてあらゆる方面に於て此の道場によつて何ものかを感化されたと思ふ。

日章旗の燦として輝くその下に、我々が働くその誇らしさ！ あらゆる苦心に打ち勝つ！ その苦心の後には喜びが待つて居るのだ！ 自分らは學林集團勤務を有意義に、然も感激裡に終つた。

これこそ僕の一生を記念する大きな出来事、私の中學生活中最大のよろこびとなるのであらう。

## 全校行軍

四年 有川英治

五月六日、土曜日、我が校に於ては行程三〇軒強、七里半に亘る全校行軍が實施された。時宛も健康週間に當り、且つ東亞新秩序長期建設の事變下、國家が國民殊に青少年の健康

増進に期待せる際であるだけに、この行軍の有つ意義は更に深いものがあると思はれた。  
午前八時すぎ、武裝せる五年生を先頭に嚙吠たる喇叭の音も勇ましく校門出發。新緑燃ゆる城山をあとに小波の寄せ返へす松原湖岸に出で、松原路を多景島竹生島など繪のやうな美景を賞しながら磯の出先き烏帽子岩の曲りで小憩し、水と戯れ、渚の小魚を愛し自然の公園美のやうな琵琶湖の景を賞

した。そこで十五分ほど休んだ後、我等は新装の湖畔道路を長濱に向つて行軍をはじめた。整然たる隊伍、九百健兒の元氣のよい脚の運び、砂を踏みリズム。湖の眺めは益々ひろく目的地の彼方には鐘紡の煙突、近江ヴェルベツト工場の煙突が見える。その同側に行軍の濛々たる砂埃の上に遠くスタッツと大佛像が見える。太陽は漸く高く我等の今日の行軍を見下してゐる。見れば伊吹山も今日の大行軍を有意義にと祝つてゐてくれる。愈々長濱町に入り、正午近く長濱小學校に於て晝食し午休をとつた。一同益々元氣である。

午後は長濱町から南下し、田村を過ぎ法性寺に差掛り米原へ向つた。菜種の黄、れんげ草の淡紅、さては麥の緑と田圃の春の多彩に目を休めながら、疲れてはならぬ、皇軍の勇士のことを思へばこれ位が何だ、と勇を鼓して黙々と歩いた。途中一回の休憩、中隊毎に號令で道路の兩側に腰を下した。薄綠色に小さく延びた苗代田を眼に楽しく眺めた。

愈々最後のコースに入り、米原町近くなると、空模様が変わりポツリ／＼と雨が降つて來た。自然歩調が速まる。もう一里だ。もう一里だ。降る雨の中と雖も最後までやるのだ。彦中の門をくぐる迄はこの調子で、と。質實剛健の彦中の意氣を奮つて更に行軍を続ける。そのうち雨はいつしか止んだ。見れば校長先生は依然として先頭についてゐられる。大勢の先生方も今迄に無いこの七里半といふ強行軍にも拘らず御疲勞

の様子もなく我々を護るかの如くにせつせと歩を運んで居られる。

鳥居本隧道を通る頃にはさすが足も痛んで疲れて來たが、我等は、何糞と頑張りつづけた。やつと彦根に歸る。市街地行進。午後の四時過ぎ、一人の落伍者もなく颯爽と歸校した運動場に於ける最後の分列行進。こゝぞと足を踏みつけ、校長先生のお賞めの御訓辭をいただき七里半突破といふ尊い體験を喜びつゝ恙なく本日の大行軍了ることが出來た。

出發の元氣、歸校後の倦怠——、それは誰にもあることだが、かの涯なき戦線曠野に山岳地に一日十里二十里を馳け廻つてゐられる皇軍の諸勇士の日夜と比べて、何のこれしきと自覺を強めてゐたためか、疲勞はしてゐるが希望の一日を果し得た嬉しさで、私は元氣よく黄昏せまる頃家に歸り著いた

## 兄と別れた日

四年 上田 隆三

昭和十二年九月の下旬のことだつた。愈々應召された兄が戦地に向ふと云ふので、僕は最後の別れにと父と共に米原驛へ出かけた。米原驛に着いたのが、午後の九時頃だつた。勿論汽車も満員で、どれもこれも凡てが面會人の群でした。

下車するともう人で押し押され、もまれ／＼で改札口へどうして行けるかと思つた。子供を連れだ出征兵士の妻であらう婦人も多數見受けられた。又酒氣を帯びてゐる人も見受けられた。僕は何時の間にか父に離れてしまつて途方にくれてゐた。憲兵分隊の人が一だんと高い臺の上に立つて、「こら！ 押す奴があるか！ 順々に並べ。そんな事するのやつたら入れたらへんぞ！」とお國訛丸出しで嘖嘖つてゐた。何とも云へぬ混雑である。

其の時、私の兄達を乗せた軍用列車がホームへと滑り込んできた。僕は夢中であつた。他人の事等はいざ知らず、唯自分のみをと云ふ小我と云はるか自己主義とでも云はるか、實に良心に恥づべき心であるかの様に前の人々を押分け／＼で石段を登つて、四方を見廻したが、いづれの方へ行けばよいかわらなかつた。幸ひにして聯隊本部に居ると云ふ事を知つたので、大勢の人々を又もや押分けて機關車の方へと走つた時は刻々と過ぎて行く。「聯隊本部は何處ですか。」と、僕は今迄出した事もない大聲で傍の兵に尋ねると、「こゝだ」と答へた。其の内にやつと兄の姿を列車の窓口に見出した。其の時の喜ばしさ。實に筆舌に盡し難しと云ふより外はなかつた。今迄知らなかつた父が兄の首を出してゐる窓の所に立つてゐたことを見出した。「兄さん、大分瘦した」「うん——勉強せいで。無論體も大切だが」「うん」と「諾」の意

を表はすべくさう答へた。さう答へるより外にどう云つて良いのか、自分自身知らなかつた。もう後は兩方共無言だつた突如、啾啾たる喇叭の音が響く、出發だ。僕は「身體を大切に、しつかり！」と云へば「うん、頑張るよ」と答へてくれた。父は「何か必要な品物が有れば手紙をよこせよ」と話しかけた。其の後は話し聲も凡て構内に轟き渡る物凄い萬歳の聲に消されてしまつた。僕等はもう二度と對面することの出來ぬ兄に對して、最後の言葉を萬歳に變へて徐々に進み行く車上の兄に、思ひ切りの聲を張り上げた。軍用列車は遠ざかつてゆく。黒い夜の帷に包まれてゆく。僕は又思はず萬歳と叫んだ。

## 世界の地圖を眺めて

四年 西村 義廣

早春の一日世界地圖を前にして僕は思つた。「世界は結局どうなるだらうか」と。

各國間の國際情勢は日に日に險惡になる。歐羅巴の天地も亞細亞の大陸も、國民感情の嵐の中で、はげしく抵抗し摩擦しあつてゐる。

國民的意識に目覺めた力の獨逸や伊太利が潑刺たる姿で躍

り出す。共産主義を奉ずるソ聯が常に支那を嚇かして、その恐るべき野望を遂げる機会を窺つてゐる。支那事變は大規模に發展してゆく。支那や印度やアジヤの地圖はどうなるだらう。中歐も南歐もコテ／＼と小さく色分けせられてゐるが、これも遂には一つか二つの色に大きく塗り替へられるのではなからうか。アフリカはどうなる。英佛などの殖民地は現状を維持し得るであらうか。

國民性や習慣風俗の各々異つた地球上の民族が、共産主義或は帝國主義等と互に勢力を争つてゐるのである。「世界の將來は如何」僕は深く考へた。そして遂に次の結論を得た。先づ最高最美の理想を有する何れかの國が世界を同化し遂げるそして、その優秀な民族に同化せられた世界はその優秀な民族の習慣風俗のみとなり、實際上に於て民族と名付くべきものは唯一つとなるのではなからうかと、一体此の優秀な民族とは何民族だらう？僕は確信する日本民族こそ世界に立つ最も優秀な民族であると。皇道の世界化といふ事は必ずや實現されると思ふ。この事は我等日本青年の雙肩に偉大なそして非常に困難な大業がかゝつて來る事を意味する。又吾等は吾等に負はされた任務の光榮にして重且大なるを痛感する。地圖に就いて日本を見るに日本は最も好い位置にある。太平洋をへだててアメリカ、大洋洲に手をのばし、アジヤ全土を皇化してヨーロッパ、アフリカと手をつなぐ。その日はい

岩や石や、更に小石が見え、小魚が水藻の間に群を成して泳いでゐる。「早く夏が來るといいのになあ、そしたら僕も小魚の様に自由自在に泳いでやるのに」とつい口走る。左側は斷崖絶壁で茶色の土をむき出してゐる。

「休憩だ」ラツパが高らかに響く、僕等の心は慰められる僕は石垣の上に腰を下して、晴れた青空を睨む様に見える目をおとすと目的地の長濱が遠く、遙かに白く、湖上に浮んでゐるかの様に見える。誰か投げた石の爲に水が跳ねる。風に連れて波がひた／＼と石垣を打つ。所在の岩に挿り穿たれた洞穴へ物珍らしげには入つて、楽しんでゐる者もある。十五分位経つて集合ラツパが鳴つた、再び我々は行進を始めた。磯の入江だ。小鳥が我々の強行軍を祝福するかの様に、囀づりながら飛んでゐる。我々は杉原先生のおつしやつた「赤鬼魂の意氣を持つて——」を守り本尊として、堂々と立派な行軍を續けて行くのだ。サク／＼と小石を踏む。此の元氣の中にグ／＼と行程は運ぶ。行手には我々の目的地たる長濱町が見えてゐる。進み行く長い一本道——われらの強行軍。

行軍記

四年 長野 弘二

つくるだらう。その日が來るためには吾等は未だ會てその例を見ざるまでの努力の上に努力をしなければならぬと思ふ。今から二十年後、僕達が中心となつて日本を支へる頃ともなれば世界の地圖はどんなに變るだらう。思つただけでも身のひきしまるのを覺える。

途上

四年 花澤 宏

「あゝ、氣持ちが良い」と呟いた。松原湖岸に出ると、急に眼界が開けて湖を渡つて來た風が、早や汗ばんだ頬を掠める。多景島も竹生島も霧か雲か一面に薄霞んで見えない。湖上に小舟が二つ三つ浮んで居る。松原の松並木、湖畔を歩む心には、「我は海の子」の歌を思ひ出させる。續く松原の果ては磯山。其の磯山がぐつと出て、山は湖畔に迫つてゐる。先端が岬々たる岩、其の岩松の眺めが良い。左手には薄い鮮かな若葉の桑と、黒ずんだ濃い麥草、それにえんどう菜の花と何とも言へない氣持ちの良い新緑の配合を成して居る。其の向ふには内湖の水が目をあびて光つてゐる。

磯山を廻るあたりは新装の湖畔道路で城壁の如き石垣が湖畔に沿ふて、ずつと續いてゐる。石垣から下を覗くと水中の  
一、前夜……「明日は野外演習——」杉原先生のお言葉が大きく浮いて、また消える。それからの一日は楽しい愉快な行軍の想望が頭の中をぐる／＼廻るまゝに暮れてしまつた。それにして先程から風の吹くのが氣懸りだつた。木の葉の揺れ、雨戸のガタツク音。露地門の屋根に何だか音がしたので雨戸をさつとあけると電燈の光が外に逃げ出る。お庭の岩躑躅の花が萎れてゐる。松の枝が怪鳥の翼の様に氣味悪い空にいつも煌く星も見られない。「駄目かな」と兄の聲。明日は雨か、晴か、黒雲が不安を孕んで押へてゐる。

二、湖畔行……朝曇りが、いつか快く晴れ上る。嚙喰たる喇叭の響に、氣遣はれた空の雲も霞と溶けて校庭の大銀杏の下を發足してから早や小一時間。道を松原にとつて湖邊に出る涼しい風が横顔に氣持よい。見放くる湖上は静かだ。さつと打寄せては静かに退いていく波。沖を走る漁舟も、折からさし出てた太陽に、きら／＼と照らされて漂ふ。油を溶かした様な碧い湖面に進みもやらずいさようであるかの白帆の軽い眺め。渚の岩に蹲つて洗濯をしてゐる女の人の手に波が光るこゝで見ると琵琶湖の景色は美しい詩だ。我等彦中生九百の健兒はこの詩の湖を左にして蜿蜒として行軍を續ける。黙々として歩を運ぶ。千々の松原磯の烏帽子岩、長濱へ直線に突き入る湖畔道路、入江、天の川、鐘紡の高い煙突、何とかいふ大佛様の嚴めしいコンクリート像。いよ／＼長濱に着く。